International Symposium on Aquatic Macrophytes, 18—23 September 1983, Nijmegen, The Netherlands に出席して

相生啓子

(東京大学・海洋研究所)

世界中で一番機能的と言われるスキポール空港から高速バスに乗って30分位でユトレヒトに着く。アムステルダムに人口が密集しているせいで、国土が狭く人口密度が高いはずなのに、大きなユトレヒト駅の乗降客は疎らである。ユトレヒトから列車に乗りアーンへムで乗り換えて約一時間でナイメーヘンに到着した。表示は全部オランダ語で書かれているが、迷う事も無かった。ヨーロッパでは、イギリスの次に英語が通じる国である。バスの運転手でも慣れた英語で答えてくれる。

ナイメーヘンから20kmも行くとドイツ国境である。ライン川支流の水郷地帯に隣接したナイメーヘンの町は、建物の色を意識的に、白と茶色系統で統一していて落着いた雰囲気がある。シンポジウム会場は、この辺では最も古い、大きな池のあるプラスモーレンホテルとカソリック大学理学部の二ケ所。移動には、大型の観光バス二台を使っての団体行動である。

会期中講演発表55題と、ポスターセッションに20題程の発表が行なわれた。このうち海草に関する研究発表は、約一割で、残りは、陸水関係の研究発表であった。ヨーロッパにおける海草関係の研究の現状について気がついた事を記しておこう。

大西洋では、1930年代に粘菌による病死とみられる Zostera marina (アマモ)の大量斃死によって消滅した後、徐々に回復の方向に向ってはいたが、堰堤を築いたりというような人為的影響も加わり、1975年頃より Z. marina が減少しはじめ、代りに Z. noltii が増加しはじめた。Dutch Wadden Sea では、嘗って優占種であった Z. marina と完全に置き代って、現在、Z. noltii が優占している。この二種類の海草の動態を左右する要因として水鳥による捕食圧があげられるが、この方面からの研究の必要性が強調された。北欧における海草研究においては、Z. noltii のように浅瀬の生物に限らず、野外調査の困難な点は、冬期、野外での充分な調査ができないという事である。実験室内でコントロールされた条件下で、プロダクションを測定する事と、実際の野外でのデータとの矛盾をどう解決

していくべきかといった内容の議論が、総合討論で行なわれた。他方、地中海の Posidonic oceanica については、研究者の層も厚く、物質代謝など、様々な側面からの研究が進められている。特に堆積の問題から、根の部分の代謝に関する研究が行なわれている事に注目していきたいと思う。

陸水の水生植物に関しては、大学院生のなかには、特にアメリカを中心として、種間関係や群集を扱ったコンピューターによる解析というテーマに傾いている風潮もあるが、多くは、古典的な陸水学を踏襲しているようで、IBPで行ったような、湖沼における生物(水生植物では多かったものとして、Nymphaeaceae, Najadaceae, Potamogetonaceae など)の有機的なつながりを明らかにしていくという内容につなげる為の生活史なり生産力なりを知ろうとする研究が多かった。

最も新しい問題として、北欧では深刻になりつゝある酸性降雨による植生の変化を扱った研究発表も行なわれた。特に印象深かった発表では、1726年から1983年までのイギリスのスノードニア地方の湖沼の植生の変化に関する研究で、200年以上ものデータを示し、それらの湖沼の周辺の土地利用(酪農、国定公園、鉱物の採掘など)によって変化してきた様子を調べたものである。さすが長い科学の歴史と伝統ある国柄と感服した次第である。日本だったら酸性降雨の問題が起こったとしても、それ以前のデータが何もないので、浅薄な研究しかできないであろう。基礎研究が評価されていない日本との差をまざまざと見せられた思いがした。

三日目のエクスカーションでは、ナイメーヘンの南西部にある、Noord Brabant の水郷地帯にある昔ながらの堤防見学と水草の観察を行なった。アトラクションとして400台以上もの自動車ばかりを展示した博物館を見学した。

Noord Brabant では、ライン川支流の雪溶け水が 溢れて堤防を越えてしまい、毎年水びたしになる。しか し、人々は昔ながらの土を盛った堤防をコンクリートに しようとはしない。コンクリートで切ってしまうと周辺 の生物環境が変ってしまうからである。農耕にとって最も大切な、肥沃な土壌を育んでくれるのが、アルプスからライン川に流れ込む豊かな水と、それによって育生される森や林や草原といった自然植生である事を人々は、子孫に伝えてきたのである。この周辺の工業地域は、アインドホーベンに集中していて、農業地を残して置く為の土地利用政策が行き届いている。この様に目先の利益に飛びつくような愚かな事をしないで、豊かな土地を護って行こうとするオランダ人の合理性と、5日間で300頁もの Proceedings を印刷し、最終日に出席者全員に手渡すという驚異的なビジネス感覚をもっているという点で、小さな国であり乍ら高い生活水準

を維持しているオランダという国柄の一面を知る事ができた。

ョーロッパのシンポジウムは、私にとっては、二度目の経験であるが、出席者は、圧倒的にヨーロッパの人々が多く、ドイツ、オーストリー、ハンガリーなどお国訛りの英語で話してくれるので、日本人が変な英語で話しても許してもらえるという気楽さがあり、何と言っても、ヨーロッパの伝統ある科学の雰囲気を知る上で一番良い機会ではないかと思う。もし観光で外国旅行をなさる余裕のある方は、二年毎に開かれるこのシンポジウムに出席なさるようお勧めしたい。次回は、来年デンマークで開催される予定である。

兵庫県六甲山に自生するサギスゲ

岡島一允 (阪急電鉄)

国際港として、全国に知られている神戸港、その港を見下す絶好の展望台となっている、背後にそびえ立つ六甲山(931m)は、東西50キロにも及ぶ山波を持っています。ケーブルカー、ロープウェー、ドライブウェーが通じ、ゴルフ場やホテルが建ち、開発されたとはいえ、関西の山男には、心のふる里ともいえる山で、よく登られています。

植物相においては、温帯性から寒帯性までの植物が自生し、貴重な植物が絶滅しつつある現在、四季を通じて植物観察の場所として、よく利用されています。六甲山

系の東側に、ゴロゴロ岳と呼ばれるピークがあり、標高(565.6m)のところからユニークな山名を持っています。この西側をイモリ谷といって、今から20数年前には、池があり、湿原状となり、サギソウや食虫植物他、湿原植物の豊庫でしたが、今では開発されてしまいました。今は、昔のおもかげすらありませんが、この住宅地のなかに残された小さな池に、僅かに珍らしいサギスゲ Eriophorum gracile Koch var. coreanum Ohwi(カヤツリグサ科)が自生しています。氷河期の残存植物として知られ、多くの植物とともに、氷河期に南下してきたサギスゲが、その後温暖になり、北へ逃げおくれた植

物として、六甲山系の一部に残り、また、日本南限の自生

地として、現在、高いフェンスや有棘鉄線に囲まれ、厳重

に保護されています。手にとって真近に観察できないのが



写真1・2 サギスゲ

